慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	フランスに渡った邦人庭師：畑和助の軌跡（上）
Sub Title	Un jardinier japonais en France : sur les traces de HATA Wasuke (première partie)
Author	鈴木, 順二(Suzuki, Junji)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.49/50 (2009.) ,p.189- 210
JaLC DOI	
Abstract	Les Mémoires de Robert de Montesquiou rapportent l'existence d'un jardinier japonais, « Hata Wasuké », qui vint en France pour présenter l'horticulture nipponne à l'exposition universelle de Paris en 1889 et qui y resta longtemps. Avant nos recherches, on n'avait aucune information détaillée sur ce jardinier particulier. En rassemblant divers documents fragmentaires (essai de Montesquiou, le Journal des Goncourt, articles parus dans des revues, archives conservées dans le Bureau des documents diplomatiques du Ministère des affaires étrangères du Japon, photographies, souvent ni légendées ni datées, conservées à la Bibliothèque nationale de France ainsi qu'au Musée Le Vergeur à Reims), nous reconstituons dans cet article la vie originale de ce jardinier «de génie». Après la fermeture de l'exposition, Hata a été engagé par Montesquiou pour embellir son jardinet, rue Franklin à Paris, pour construire un jardin japonais à Bois-Boudran (Seine-et-Marne) chez la comtesse Greffulhe en trois ans, puis pour soigner les plantes du pavillon Montesquiou à Versailles. Il a également créé dans les années 1890 un jardin japonais dans le parc «Midori no sato» aux Loges-en-Josas, à quelques kilomètres de Versailles, qui appartenait à Hugues Krafft. Nous publions aussi au moins une photographie pour chaque étape de son travail en France. Dans la seconde partie de l'article, nous mettrons en lumière la dernière moitié de la vie de Hata chez Edmond de Rothschild à Boulogne-sur-Seine. Nos regards se porteront également sur la famille Hata à Yokohama, ville natale du jardinier.
Notes	Mélanges dédiés à la mémoire du professeur OGATA Akio =

	小潟昭夫教授追悼論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0189

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フランスに渡った邦人庭師
――畑 和助の軌跡（上）

鈴　木　順　二

1889年（明治22年）、フランスの首都パリは国際的な祝祭に沸きたった。フランス革命100周年にあたるこの年の5月、万国博覧会が開幕したのだ。竣工したばかりのエッフェル塔がそびえるシャン・ド・マルスをはじめ市内の3ヶ所を会場として、11月までの入場者は3,200万人を超え大成功を収めることになる。

この博覧会には日本も展示に参加した。シャン・ド・マルスの主会場に和風のパビリオンを設け、陶磁器、漆器、七宝、織物などの工芸品や酒類などを展示した。さらに、園芸も出陳された。日本庭園を造り、欧米ではまだなじみのない日本産の様々な植物を運び展示・販売しようという目論見だった。鉢植えの花卉の輸送には苦労をともなったが、狙いは的中し、園芸展示は好評を博して金賞を受賞した。この時、植物の管理や造園のために、日本から庭師がひとりパリに渡っていた。金賞受賞の功労者といえるこの庭師は、その後特異な人生を歩むことになる。庭師は博覧会閉幕後もフランスにとどまり、かの地の日本文化愛好家（ジャポニザン）たちに請われて各地で日本庭園造りに活躍したのだ。最終的には、世界的な富豪のお抱え庭師となって20余年思うがままに腕をふるい、大規模な回遊式庭園を造り上げた。その間にフランス人女性と家庭を持ち、結局一度も日本に戻ることなくフランスで一生を終えたのだった。本格的な日本庭園をいくつも築庭し、当時パリのジャポニザンの間でよく知られていたこの男のことは、その後時の経過とともにすっかり忘れられてしまった。日本とフランスの両国、さらにはイギリスにも眠っているこ

の庭師に関する資料を掘り起こしながら、歴史にうずもれた一人の職人の生涯を辿ってみたい。

庭師が渡仏した当時、フランスでは折しも日本趣味の流行が全盛を迎えていた。1867年から1900年まで11年ごとに都合4回パリで開かれた万国博覧会では、日本の美術工芸や園芸が常に話題を呼んでいた。革新的な画家や工芸家は浮世絵版画をはじめとする日本の美術品に新しい美を求め、長崎を舞台とするピエール・ロティの小説『お菊さん』（1887）が評判となり、日本の諸芸術を紹介する豪華な月刊誌『芸術の日本』（1888–1891）が刊行されていた。ジャポニスムやジャポネズリといわれるこうした幅広い流行を身をもって生きた一人が、ロベール・ド・モンテスキウ（1855–1921）だった。非常に古い貴族の家柄に生まれたモンテスキウは、高度に洗練された趣味をもつ稀代のダンディとして社交界を賑わした名士だった。と同時に、作家エドモン・ド・ゴンクール、画家ホイッスラー、工芸家ガレら、日本美術から多大の影響を受けた芸術家たちと個人的に親しく交わった彼は、自身でも日本の美術工芸品を蒐集するジャポニザンでもあった。モンテスキウこそこの庭師を見出し、技量を高く評価して雇いいれ、その生涯を決定づけた人物なのだ。

まず、詩や評論を書く文人でもあったモンテスキウが、庭師をどのように論評していたか見ておこう。初めに引くのは、ゴンクールの日本美術コレクションが1897年に競売にかけられた折、『ル・ゴルワ』紙のために書かれた「ヨーロッパの日本人」と題する随筆から。

> 89年にトロカデロ［万国博の園芸展示会場］に作られた小庭園は高い評価を受けた。そこでは、日本人庭師のHata Wasukéが、香りの強いカノコユリをふんだんに咲かせ、巧みに切り取ったキヅタをごく小さな岩にからみつけ、それを奇怪な植物と組み合わせたりしていた。その植物が奇怪なのは、生長は悪いのだが、ありえないような曲線を描いてうねっていて、しかも気品をそなえていたからである。［中略］――「ご

ろつき、絶対だめ。それ、すごい。」一風変わったHataは私にこう断言したのだった、私がこの男を雇いたいと思ったときに。

こうしてHataは私の庭師となり、この上なくエレガントな生け花を作ってくれた。モンテスキウ邸［ヴェルサーユにあった邸］でそれを記憶にとどめた訪問客は一人にとどまらない。こうした花の生け方はきちんとした習い事であり、美学であって、それを学び深く理解するムスメたちが使う特別な挿絵本に書かれている。また、秘訣を請われるとHataは、「日本で、ぎっしり詰め込むこと、絶対しない」と、格言でも言うように答えるのだった。

祝日になると、Hataは私に話がしたいと申し出て、和服に身を包み、仕事に使う絵入りの本を見せてくれるのだった。その本は、季節ごとに彼方にいる同業者が送ってくるもの、つまりショウブやボタンやキクの最新の品種が加わって増え、いっそう美しくなっていった。そうした水彩画を自慢げに広げて見せるときHataの眼はキラキラとして、小箱のなかの宝石を客に披露する宝石細工の職人のように得意げな輝きをたたえていた。

Hataは夏の夜には照明職人にもなった。日が暮れかかり、戸外での晩餐時になると、いくつも行灯に火を灯してくれた。それは思いがけない調和を生み出すような位置に昼のうちに置かれているのだった。そして文字をひとつ染め抜いた青い布地の短い仕事着をまとったHataのずんぐりとしたシルエットが金屏風のなかに浮かび上がると、それはまるでアリエル［シェイクスピアの『テンペスト（あらし）』に登場する空気の精霊］の性格をおびたキャリバン［『テンペスト』に登場する野蛮で奇形の魔女の落し子］か、翼をはやし、顔をしかめた逞しいパック［シェイクスピアの『夏の夜の夢』に登場する精霊］のシルエットのようだった。[1)]

さらにモンテスキウは回顧録のなかでも、日本人庭師についてこのように回想している。

その前年［1889年］の博覧会のおかげで私はそれぞれに興味深くいろいろな意味で貴重な2人の知己を得た。後で詳しく述べるナンシーのガレと1人の日本人の庭師である。庭師はキャリバンに似ていたが、芸術的で風変わりなところもある植物学の分野に優れていた。この男は日本で1,000人のなかから選ばれて来たのだが、選んだ輸入商と思われる人物は、良心的というよりは抜け目がなく、最後には勘定を払うことさえしないで庭師を置き去りにしたのだった。庭師はトロカデロの展示公園の一角に日本園をこしらえていた。そこではユリが咲き、樹齢数百年をへたあのクロベが身をよじっていた。こうしたクロベは旧い日本の気まぐれに依然忠実な園芸が今日なお、わざわざ作っている小人なのだ。［中略］

私はその囲いのなかで散策したり読書をするのが習いとなり、友人や上品な婦人たちを案内した。そして結局Hataは（それがこの小柄（マ）な醜（ゴ）男の名前だった）私を神盾とも拠り所ともしたのだった。その庭師を使って私の庭をきれいにした後も、連絡を保ち、すばらしい境遇を保証してやることができた。ブローニュにいるエドモン・ド・ロッチルドのところに入れたやったのである。ロッチルドはこの男の腕を高く買い、会うたびに私の地の精（グノム）を贈ったことに礼を述べてくれるのである。［中略］Hataは天分に恵まれた庭師だと思う。[2)]

この2つの文章からは、以下のことが判る。庭師の名はハタ・ワスケ（引用文にあるとおり、モンテスキウは日本式に姓・名の順に書いている）。ハタは1889年の万国博でトロカデロの園芸展示会場に日本園を作り、盆栽の古木や草花の手入れにあたっていたところをモンテスキウの目にとまり、一時モンテスキウに雇われ、その庭を日本風にあつらえ夜会の準備などにも腕前を発揮し、後にその紹介でエドモン・ド・ロッチルド［ロスチャイルド］に雇われることになった。モンテスキウによると、ハタは片言のフランス語を話し、字を染め抜いた青い仕事着 —— 職人の半被だろう —— をはおって仕事をしていたが、その小柄な醜男の外貌からはシェイクスピアの戯曲に

出てくる野蛮で奇形の登場人物が連想されるのだった。

モンテスキウの文章から姓名が分かる庭師ハタ・ワスケについては、東京の外務省外交史料館に保管されている複数の資料で身元を確かめることができる。ひとつは旅券の発給記録だ。『海外旅券勘合簿、神奈川縣之部』には、明治22年（1889年）1月31日の記録として、「神奈川縣橘樹郡鶴見村千拾番地」の「平民」「畑和助」に「佛　巴里府」を目的地として旅券を発給したという記載がある。この旅券は一次旅券だが、返納された記録がないので畑は帰国しなかったと思われる。さらに詳しい別の資料については、いずれ参照するが、それによると畑和助は慶応元年（1865年）6月10日生まれで、渡仏したときには23歳だった。モンテスキウが雇ったHata Wasukéが横浜出身のこの畑和助であることは確実だ。

先に引用したモンテスキウの回顧録では、多くの候補者のなかから畑を選んで連れてきた「輸入商と思われる人物」に言及があった。この「輸入商」は、万博で日本の園芸品を出陳した笠原惠（かさはらけい）（1857−1919）をさすと思われる。笠原惠は慶應義塾に学んだ後、福澤諭吉の紹介で丸屋商社（後の丸善）に参画し、傍ら横浜で貿易業を営んでいたという[3)]。1889年の万博に関する日本の公式報告書には、「笠原惠ハ植木職一名ヲ伴ヘリ[4)]」と書かれており、この無名の「植木職」が畑と考えられる[5)]。

笠原はこの万博の第79類「粧飾ノ花卉及ヒ植物」の部門で金賞を受賞した[6)]。日本の農商務省の報告書はこの展示が好評を博した模様を、次のように紹介している。

> 笠原惠ノ出品ハ盆栽數種ト蘇鉄百合根其他花草アリ　開花ノ期毎ニ審査ヲ乞ヒ大ニ名聲ヲ得　百合根ノ如キハ注文ヲ受ケ更ニ又數百根ヲ取寄タリト云フ　トロカデロノ日本園アル事ヲ世人ニ知ラシメタルハ盆栽ノ力多キニ居レリ　就中松柏科ノ植物ニシテ百年ヲ歴タルモノモ尚ホ能ク短小生育シタルニハ觀客ヲシテ其園藝技倆ニ巧ミナルト其忍耐力トニ驚歎セシメタリ　從テ珍奇ヲ好ムノ歐洲人其價ノ貴キヲ厭ハス購フ者特ニ多カリシ[7)]

花類が高評価をうけたこと、後に重要な輸出品となる百合根や盆栽の販売も好調だったことがわかる。盆栽をはじめとする鉢植えの植物を酷暑の赤道を越え長期間かけて運んだ船中での管理、万博会場での作庭、日本とは異なる風土で春から秋まで多様な植物を栽培したときの苦労などを考えると、金賞の受賞に植木職人・庭師としての畑和助の専門的な技能がどれほど重要な役割を果たしたか、容易に想像できよう。万博の展示のみならず、その後のフランスでの畑の仕事振りを 30 年以上にわたって見つめたモンテスキウが記した言葉 ――「畑は天分に恵まれた庭師だと思う」―― には、畑に対する賛嘆の念が表れている。普段のモンテスキウは気位が高く、尊大な態度と辛辣な批評で知られていたが、ここでは、彼がどれほど高く畑の腕を買っていたかを素直に述べている。

なお、万博で畑を使った笠原惠はパリから帰国後、故郷の新潟県に戻り商業を営んだ。晩年に挿絵入りの自叙伝を遺しており、そこにはパリ万博への参加についても記述がある。しかし、パリで福澤諭吉からの紹介状を持って日本公使の田中不二麿に会った話、輸送した植物の箱に米や味噌も入れていたために税関でもめた話までで自叙伝は未完のまま終わっており、万博の展示等については語られていない[8)]。

畑が携わった万博の日本園が評判を呼んだことは、フランスの雑誌記事でも確かめることができる。当時の代表的な雑誌『両世界評論』では、次のように紹介されている。

> トロカデロのスロープの、竹の柵に囲まれた日本の園芸展示場でご覧なさい。人工の島に模様を描く可愛らしい庭、細い水の流れに渡された木の幹の橋、樹齢 100 年を数えながら高さは 50 センチに過ぎないスギとモミ、苔むした岩、薄暗い洞窟、四阿、草色の植木鉢から生えている小人のような樹木を。それは巨樹と見紛うばかり、人の手に素直に従って形を整えられた一風変わった自然なのです。人は努力を結集して自然の力を子供の玩具に変えたのです。つまり数十センチ角のなかに森全体を閉じ込めて自然を維持しながら、溢れんばかりの植物を前にしたかの

ような錯覚を与えるのです[9)]。

注目を集めたのは、自然をミニチュアのように再現した池、島、流水、橋、四阿のある300坪余りの庭園と盆栽の老樹だったようだ。

有名な挿絵入り雑誌『イリュストラシオン』6月8日号の記事「万国博覧会における日本の園芸」は、次のような書き出しで始まっている。

> シャン・ド・マルスをうめる群衆のうねりから逃れ、時にトロカデロののどかな木陰に避難しようとする散歩者は、おそらく公共土木工事館のそばに、簡素な竹垣に囲まれた傾斜地の小さな庭園があるのに気づいたことだろう。それが東京の園芸家笠原氏の展示場である。それは人通りの多い通りから離れたところにあり、花を愛し探索する人たちだけの目を引く、緑の木々と芝生とすばらしい花々に囲まれた場所で、呼びこみも挑発もせず訪問者を慎ましやかに待っているとはいえ、その誰の目にも明らかな異様さは一見の価値があるものだ。
>
> 切り株を思いつくままに並べた階段、それも、われわれの園芸家がするように横に並べるのではなく輪切りのまま置いた階段を何段か登る。右には小さな展示館、その前に簡素なあずまや風のものがある。すべては木と竹でできている。もう一つ同じようなあずまやがあり、庭園の奥のスペース全部を占めている。それらのあずまやの下に、植物を植えた無数の陶器の鉢が、籠に入れたり道沿いの低い台に載せたりして置いてある。鉢植えの木の中でただちに目につくものがある。それは、まさしく木々のミニチュア、小びとの木々で、高さはせいぜい40ないし60センチだが、均整がとれ調和のよさも完璧で、その点では人間の場合のたいがいの小びととは違っている。双眼鏡の筒の反対側から見た木を想像していただきたい。[10)]

記事ではつづけて、どのようにして樹木の育成を抑え永い年月をかけて整姿しつつ育ててゆくのかが、展示された盆栽3点の絵とともに詳しく紹介さ

れている。日本から船に積んだ植物の 3 分の 2 が、輸送の途中で枯れてしまったことも書かれている。

また、11 月 9 日号の『ル・モンド・イリュストレ』誌でも、日本園が取り上げられ、盆栽の珍奇な姿とそれをフランスまで運んだときの苦労話が紹介されている。この記事に添えられた挿画を見てみよう（図 1）。日本園入口の四阿と奥の庭が描かれている。四阿のなかでは半被を着た男が腰をかけて、小机に向かって手仕事をしている。職人の姿を描いているのは『1889 年万国博覧会誌』でも同様だ。四阿の内部を仔細に描いており、屏風が置かれた座敷のふちに腰掛けた半被姿の職人が、ユリのような花を扱っている（図 2）。絵に描かれたのは、いずれも畑和助だろう。

このように評判を呼んでいた展示は園芸趣味をもつ人々のみならず、ジャポニザンたちの関心も惹きつけたと思われる。植物をモチーフに多用した工芸家エミール・ガレ[11)]、美術商で『芸術の日本』を編集していたジークフリート・ビング、『日本美術』（1883）を著したルイ・ゴンス、印刷業者で大コレクターとなるシャルル・ジロ、版画家のアンリ・リヴィエール、その他 G. ミジョン、H. ヴェヴェール、P. バルブト、E. ド・ゴンクール、後述する H. クラフトらは無論のこと、美術商の林忠正をはじめとする滞仏中の日本人も訪れ、畑の姿を目にしたことだろう。畑もまた、仕事の合間には他所のパビリオンを見てまわり、世界の主要国やフランス植民地から集められた珍しい物品・最新の技術を目の当たりにしたに違いない。トロカデロの日本園から毎日間近に見上げていたエッフェル塔にもエレベーターで昇ってパリを見下ろす眺望を楽しみ、大革命 100 周年の記念行事が催された 7 月 14 日には、それらに参加してお祭り気分を満喫したことだろう。

ここで当時の写真を見ておきたい。万博会場のトロカデロに程近いフランクリン街にあったモンテスキウのアパルトマンの庭だ（図 3）。これはフランス国立図書館手稿部が所蔵する「モンテスキウ文書」に収められている。右の人物がモンテスキウ、左は姪のオード（1882− ？）。モンテスキウは 1894 年までこのアパルトマンに住み、その後広い庭のあるヴェルサーユのモンテスキウ邸に移ったので、この写真は万博が開かれた 1889 年から

94年までの間に撮影されたものと思われる。万博の日本園で購入したものか、見事な盆栽や花盛りのアジサイ、それに花の終わったユリが何鉢か見える。これらの植物の世話をしていたのも、竹で小奇麗な小屋掛けを組んだのも、モンテスキウに雇われた畑に違いない。1891年7月7日にここを訪れた文豪エドモン・ド・ゴンクールは、有名な『日記』のなかでこう書いている。「モンテスキウ＝フザンサックを訪問。『さかしま』のデ・ゼサント［ユイスマンスの小説『さかしま』の耽美的な主人公］だ。［中略］小さな庭を一周する。［中略］風変わりな小庭である。庭木というのが、モンテスキウが日本展で買った半ダースほどの鉢植えのカシワやクロベなのだ。矮性なので樹齢は150年に達するが大きさはカリフラワーほどしかなく、犬か猫の背中のように撫でてみたくなる[12]。」モンテスキウは幅広い交友関係をもつ社交人だった。和風に整えられた「風変わりな」この庭と盆栽を目にし、日本人庭師が働いていることを知った人はゴンクール以外にも少なくなかったと思われる。

さて、フランクリン街8番地の自宅[13]に近いトロカデロの日本園が気に入ったモンテスキウは、万博開催中しばしばそこに通い、友人知人も案内したということが、回顧録に記されていた。さらに、畑を雇ってからは、そのことを周囲に吹聴していたふしがある。たとえば、ゴンクールの『日記』には、モンテスキウが語った畑と思われる日本人庭師のことが書かれている。1895年8月15日、エドモン・ド・ゴンクールは日記にこのように記した。

> この男は本当に愉快で興味深い。あのモンテスキウである。才気に富んだ弁舌、逸話のストック、珍妙なことに関する知識、こうしたものがことごとく人に気に入られたい願望とない交ぜになっている。
>
> 自分の日本人庭師のことを話してくれた。庭師は初めグレフュル伯爵夫人のところにいたのだが、そこを飛び出してしまったのだ。というのも、庭師に食事を出すよう仰せつかっていた者が、食費をきちんと受け取っていたのに、くる日もくる日もウサギを毎朝殺して庭師に食べさせていたので、3年間この食餌療法を受けた果てに、庭師はこれ以上続け

> られないと言ってモンテスキウのところに逃げ込んできたのだった。この日本人庭師はフランス語を格言のようにして話すらしい。それも、もっとも現代的な慣用表現のなかから選んだ格言で。この男がモンテスキウの前にはじめて現れたときには、こんな言葉を述べた。「ごろつき、絶対だめ …… それ、すごい。」さらに、日本庭園については、フランス庭園の対極としてこう語るのだ。「日本の庭、ぎっしり詰め込むこと、絶対しない。」[14)]

この日本人庭師が口にしたという格言のような言葉 ——「ごろつき、絶対だめ …… それ、すごい」、「日本の庭、ぎっしり詰め込むこと、絶対しない」—— は、初めに引いたモンテスキウの文章「ヨーロッパの日本人」では畑の台詞として紹介されていた。このことから、ここでゴンクールが言及している庭師も畑和助と考えられる。『日記』に名前が出てきたグレフュル伯爵夫人というのは、モンテスキウの従妹で、もっとも華やかなサロンを主宰するパリ社交界の名花と謳われた女性であり、『日記』には何度か登場する。また、マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』の登場人物ゲルマント公爵夫人の主要なモデルとされている。では、この庭師がグレフュル伯爵夫人のところに 3 年間いた、とはどういうことだろうか。実は、万博閉幕後モンテスキウに雇われた畑は、ほどなくグレフュル夫人の広大な領地と館があったパリ東郊のブワ = ブドランに遣わされたらしい。モンテスキウからグレフュル夫人に宛てた手紙や電報の内容から、万博閉幕後、日本園で使われた四阿は解体されて、畑がついて鉄道でブワ = ブドランに送られたことが分かっている [15)]。実際、ブワ = ブドランでの畑の仕事の一端を示す写真が存在する（図 4）。これもフランス国立図書館の「モンテスキウ文書」に収められているもので、モンテスキウの秘書ピナールの手で、「ロベール・ド・モンテスキウ、ブワ = ブドランにて、グレフュル伯爵夫人邸」と記されている。流れをまたぐ可愛らしい反橋の上に腰掛けているのがモンテスキウだ。後ろには雪見形の石灯籠が見える。小さな築山や凹凸のめだつ庭石もある。畑は草木の手入れにとどまらず、様々な意匠を凝らした庭造り全

般によく通じた職人だったことが窺える。万博会場から運ばれた四阿や藤棚も、きっとこの近くに建っていたのだろう。それから100年以上の歳月が流れ、ブワ＝ブドランの領地は今日ではゴルフコースになりはてた。モンテスキウをはじめとして、館に招かれた多くの客が日本情緒を楽しんだ庭園の跡は、今では何も残っていない。

「モンテスキウ文書」からもう一枚写真を見ておこう。こちらはヴェルサーユのモンテスキウ邸にあった温室で撮影された（図5）。床や右手の棚の上に盆栽が見える。中央奥で横向きに立ってポーズをとる男、この男こそモンテスキウが当時雇っていたことが確実な庭師、畑和助に違いない。日本の植木職人の仕事着の上に、「植」の字をあしらった半被をまとっている。万博会場で見られたのと同じ姿だ。がっしりした体つきだが、やや猪首で、モンテスキウが書いたように「ずんぐり」として確かに「小柄（マ）な醜（ゴ）男」に見える。同時に撮ったと思われる写真（図6）が『ルヴュ・イリュストレ』誌の1894年8月1日号に掲載されているので、この写真も同年のものと推定できる。こうして日本人庭師のことは、同誌の読者の知るところとなった。また、この年の5月30日モンテスキウ邸では大規模なパーティーが催され、この温室にも客が訪れた。当時モンテスキウに傾倒していた22才のマルセル・プルーストは、パーティーの模様を報告する『ル・ゴルワ』紙に寄せた記事のなかで、「珍しい花が咲き、繊細な小鳥がいる日本の温室[16)]」として紹介している。このパーティーも、モンテスキウお気に入りの盆栽や日本人庭師のことが広く知られる機会となっただろう。

ヴェルサーユのモンテスキウ邸でも、畑の仕事は盆栽の手入れにとどまらなかった。例えば「ヨーロッパの日本人」でモンテスキウが書いていたように、畑は「この上なくエレガントな生け花」を作って屋敷を飾った。そのことを裏付けているのは作家アルフォンス・ドーデの夫人の証言だ。先に触れたように1894年5月30日の午後、モンテスキウ邸では盛大なパーティーが開かれた。グレフュル夫人はもちろん、100名を超すパリ社交界の名士が一堂に集い、庭に特設された大テントではかの名女優サラ・ベルナールやバルテ嬢がデボルド＝ヴァルモールやモンテスキウの詩を朗読し、レオン・ド

ラフォスがピアノを演奏した。このパーティーは、「その後20年間にわたって、社交界でもっとも華やかな光彩に満ちた催し[17)]」といわれるほど豪奢なものだった。モンテスキウの威信をかけた大切なこの日、玄関で客を迎えたのは畑がこしらえた大きな植物の飾りだった。パーティーが終わりドーデ夫妻が別れを告げて馬車に乗ろうとしたときの出来事を、ドーデ夫人はこのように回想している。「私たちが発とうとしたとき、招いてくれたモンテスキウが、彼の日本人庭師がこしらえた飾りを持ち帰って欲しいと言ったのです。その飾りは太い木の枝でできていて、窪みに10個ほどの桃が置かれ、頂には3輪花をつけたナスターチウムと白と黒のぶどうの房が巻きついていました[18)]。」

モンテスキウ邸の広い敷地には無論整形式のフランス庭園があったが、一角には日本庭園も作られた。その庭門の写真が残っている（図7）。門の脇に置かれた籠のなかの白い猫は図6で見た日本人庭師が抱いていた猫だろうか。この庭門の前で撮影されたと思われる工芸家エミール・ガレの肖像写真がある[19)]。このことは、植物に詳しかったガレもヴェルサーユのモンテスキウ邸を訪ね、畑和助の仕事ぶりをつぶさに見たことを示している。畑が世話を焼いていた日本の植物は、多様な植物を蒐めていたガレの手にも渡っていたのかもしれない。ちなみに意気投合したモンテスキウとガレは、1892年から94年にかけて、アジサイをあしらった整理箪笥などを協同制作している[20)]。

モンテスキウがヴェルサーユに住んだのは1894年からの2年間にすぎなかった。畑がこの時期モンテスキウ邸に近い別の場所でも、見事な日本庭園を作ったことが確かめられる。注文したのはユーグ・クラフト（1853−1935）というランス出身のジャポニザンだった。クラフトは1881年から83年にかけて世界一周旅行をした折、日本に5ヶ月あまり滞在した。この時日本の伝統文化にすっかり魅了され[21)]、日本家屋を一軒購入してフランスに送らせ、はるばる日本から大工を呼び寄せて建てさせたほどなのだ。場所はヴェルサーユから4キロほど南東のロージュ・アン・ジョザスだった。ここの15,000坪を超す敷地の丘の上に家は建てられた。クラフトは二間あ

った書院造のこの建物を「ザシキ」と呼び、周囲の丘陵地に和風の池泉、流水、滝を造り、そこに橋、鳥居、石灯籠などを配して日本風の庭園とし、日本語を使って「緑の里」と名づけた。そのザシキの西側の空き地に畑が日本庭園を造ったのだ。1909 年に『田園生活』誌に緑の里の詳しい探訪記を寄稿したアルベール・モムネは、この日本庭園について「[日本家屋より] 数年遅れて、1889 年の万国博覧会のあと一人の日本の職人が築庭したミニチュア庭園[22]」と記している。ランス市のヴェルジュール博物館に保管されているクラフトの写真コレクションのなかに、この庭園を撮った写真がある。それらを見ると、小さな泉水からはじまるせせらぎと、そこにかかる木製の反橋（ブワ＝ブドランでモンテスキウが腰を下ろしていた橋に素材、形、大きさともよく似ている）、石灯籠、四つ目垣、井戸、飛石、そして築山の植栽や水辺の植物からなる、本格的な日本庭園だったことが分かる。その庭に立つ植木職人の姿をとらえた写真もある（図 8）。顔は見えないが背中に「植」の字を染め抜いた半被を着た丸刈りの男は、ヴェルサーユのモンテスキウ邸の温室に立つ畑と思われる庭師とすっかり同じ格好で、ずんぐりとした風体も酷似している。実際、緑の里で撮影された別の写真の庭師（図 9）は、モンテスキウの温室にいた男と顔つきがそっくりだ。しかもこの写真を拡大してみると半被の襟にあしらわれている文字が判読でき、「植和」と読める。植木職人の和助という意味だ[23]。これらのことから、緑の里内の見事な日本庭園に立つ庭師も畑和助その人であると考えられる。写真を能くしたクラフトが、1890 年代半ばに自邸に完成した日本庭園を、その築庭者とともにガラス乾板に焼きつけたのだろう[24]。

また、モンテスキウの回顧録によると、1894 年にパリからヴェルサーユに転居した後、畑を介して、和風庭園を持つ近隣の「民俗学者」と知り合いになったという。さらに、モンテスキウはその庭園を借りて画家ルメール夫人、音楽家レナルド・アーン等を招いて社交の集まりを催したと書いてある[25]。ヴェルジュール博物館に残る緑の里の芳名録を調べると、果たして、1895 年 7 月 2 日の日付で、モンテスキウ、ルメール夫人、アーンをはじめ、マルセル・プルースト等この集いの参加者 10 余名の署名を確認することが

できる。モンテスキウの語る「民俗学者」とはユーグ・クラフトで、その和風庭園は緑の里だったことが確かめられるのだ[26)]。畑が手がけた本格的な日本庭園の完成を待ってこの集い、モンテスキウの表現では「日本の散歩」が催されたと推定される。それにしても見事なできばえの庭園といい、半被を着た庭師といい、この写真を見て、これがフランスだと思う人がいるだろうか[27)]。残念ながら緑の里の日本家屋はその後焼失し、土地は分割されて所有者が変わり、今日ではわずかに家屋と鳥居の礎石、滝の石組み、石橋、朽ちた庭門が残るばかりだ。

なお、芳名録には1886年（明治19年）の開園以降に緑の里に招かれた多くの人の署名が並んでいる。ビング、ゴンス、ジロ、H. セルヌッシ、R. ケクラン、G. ミジョン、F. レガメといったフランスのジャポニザンのみならず、駐仏日本公使の蜂須賀茂韶、美術商の林忠正、内閣官報局長で『國華』を創刊した高橋健三、外交官で後に国際司法裁判所長官となる安達峰一郎、岡倉天心ら滞仏していた日本人の名前も散見される。日本庭園の完成以降にここを訪れた人々は、築庭者である畑和助の名を聞いていたのかもしれない。

以上概観したように、1889年のパリ万博のために渡仏した植木職人の畑和助は、万博終了後モンテスキウに雇われてパリ、ヴェルサーユ、そしてグレフュル夫人のブワ＝ブドランで植物の世話をしたり作庭の作業に当たり、1890年代半ばにはクラフトの緑の里でも見事な日本庭園を造り上げたのだった。

これまで見たように、この庭師に関する資料は日本の官庁の記録・報告書をはじめとして、当時のフランス人による随筆、日記、回顧録、雑誌記事、写真などに見出すことができる。しかし、各々は個別的・断片的であり、しかも庭師の名がハタ・ワスケであることを伝えているのはモンテスキウの随筆「ヨーロッパの日本人」だけだ。万博の公式報告書では「植木職」としか記載されず、フランスに残る畑の写真は少なくないのに、いずれにもその名前は記録されていない。万博で畑を見出し、その後の活躍を見守り、唯ひと

りその姓名を正確に記録したモンテスキウの眼識は、さすがというべきだろう。

モンテスキウの回顧録に書かれていたように、その後畑和助はエドモン・ド・ロッチルドに雇われ、パリ西郊のブローニュに活躍の場を移すことになる。

註

1） Robert de Montesquiou, « Japonais d'Europe », *Roseaux pensants*, Eugène Fasquelle, 1897, pp. 218−220.

2） Robert de Montesquiou, *Les Pas effacés,* Emile-Paul, Paris, 1923, t. II, pp. 208−209.

3） 『福澤諭吉書簡集』第 2 巻、岩波書店、2001 年、p. 100。当時の人名辞典によると、笠原は横浜で貿易業を営んでいたとき肺を病み、療養中に園芸に親しんだという（『帝國実業家立志編』求光閣、明治 24 年、pp. 112−115;『明治人名辞典』上巻、日本図書センター、1988）。したがって、笠原にも園芸の心得が多少はあったと考えられる。

4） 『佛國巴里萬國大博覧會報告書』農商務省、明治 23 年、p. 91。

5） 上掲の報告書によると、園芸展示のために笠原惠と共に渡仏したのは通弁の德田佐一郎だ。德田は後に横浜植木株式会社の取締役を務め、植物の輸出に携わった（『横濱成功名譽鑑』明治 43 年、p. 343）。フランスに残った畑とは永く連絡を保ち、造園資材を提供していたのかもしれない。笠原らの一行が 2 月に横浜港からフランスに向かったことは、横浜で刊行されていた英字新聞で確認できる。*The Japan Weekly Mail* の 1889 年 2 月 16 日号 170 ページ、“Latest Shipping”欄には、次のように記載されている。“Per French steamer Ava, for Shanghai viâ Kobe : — […] Messrs. Yamada, Oshima, Yotaro, Tsuruda, Nishimura, Mitsutaro, Kusawara, Tokuda, Hata Wasuke, A. Schmidt, […] in cabin.”フランスの汽船アヴァ号で出発した、おそらく cabin class（特別 2 等）の乗客の名だろうか、日本人の名前が見える。Yotaro と Tsuruda は万博に磁器類を出陳した香蘭社の深川與太郎と鶴田貫一だろう。Kusawara は Kasawara の誤記だろう。次の Tokuda は笠原の通訳として同行した德田佐一郎に違いない。そしてただ一人姓名ともに記された Hata Wasuke は間違いなく畑和助だ。同じページに掲載されている出港船舶リストには、“Ava, French steamer, 3,120, Bonnefoy, 10th February, — Shanghai viâ Kobe, Mails and General. — Messageries Maritimes Co.”とあるので、同船

はフランスの海運会社メッサジュリ・マリティム（いわゆる MM ライン）に所属し、2 月 10 日に上海に向けて船出したことがわかる。上海からは恐らくシンガポール、スエズ運河経由で地中海に入りマルセーユに向かったのだろう。排水量 4,420 トン、全長 117 メートルのアヴァ号については、次のサイトで写真を含めて詳しい情報を得ることができる（http://www.es-conseil.fr/pramona/ava.htm）。

6） 上掲報告書、pp. 57, 233。

7） 同報告書、p. 129。

8） 新潟県立文書館蔵、『笠原能邇伝絵巻抄』参照。

9） *Revue des deux mondes*, octobre 1889, p. 613.

10）朝比奈美知子編訳、『フランスから見た幕末維新 「イリュストラシオン日本関係記事集」から』東信堂、2004、p. 182。

11）ガレは庭で 100 種以上の日本産植物を含め、多数の植物を育てていた（ピエール・ヴァルク「エミール・ガレの植物と庭園」今井敬子訳、『エミール・ガレ　創造の軌跡展』、東方出版、2005 年、p. 159）。なおガレ自身、この万博に多数のガラス器、陶器、家具を出品して好評を博した。モンテスキウが述べていたように、ガレとモンテスキウが知り合ったのも、この万博がきっかけだった。

12）Edmond et Jules de Goncourt, *Journal*, *mémoires de la vie littéraire*, Robert Laffont, 1989, t. III, pp. 604−606.

13）モンテスキウの後このアパルトマンに住んだのは政治家のクレマンソーだった。現在そこはクレマンソー博物館として公開されている。

14）Edmond et Jules de Goncourt, *op.cit*., Robert Laffont, 1989, t. III, pp. 1165−1166.

15）Antoine Bertrand, *Les Curiosités esthétiques de Robert de Montesquiou*, Droz, 1996, p. 145 参照。Bois-Boudran の最寄の鉄道駅は 4 キロほど東の Nangis だ。

16）Marcel Proust, « Une fête littéraire à Versailles », *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, 1971, p. 363.

17）George D. Painter, *Marcel Proust*, traduit en français par G. Cattaui et R.-P. Vial, Mercure de France, 1966, p. 198.

18）Mme Alphonse Daudet, *Souvenirs autour d'un groupe littéraire*, Eugène Fasquelle, 1910, p. 195.

19）フィリップ・ティエボー『エミール・ガレ　ガラスの詩人』藤井麻利訳、創元社、2004 年、p. 64。

20）Antoine Bertrand, *op.cit*., p. 194 参照。

21）滞日中にクラフトが自ら撮影したガラス乾板による多数の写真は、当時の日本の庶民文化を伝える貴重な記録となっている。ウーグ・クラフト『ボンジュール　ジャポン』（朝日新聞社、1998 年）参照。

22）Albert Maumené, « Le Parc de Midori », *La Vie à la campagne*, 1er avril 1909, No 61, p. 199.

23）例えば、畑と同世代の作庭家の七代目小川治兵衛（1860−1933）の屋号は「植治」。

24）この 2 点を含め、ヴェルジュール博物館が保管している緑の里の写真には、撮影日時や被写体に関する記録は残されていない。

25）Robert de Montesquiou, *Les Pas effacés*, t. II, pp. 270−272 参照。

26）詳しくは拙論「プルーストの訪ねた日本庭園（上）」、『日吉紀要　フランス語フランス文学』26 号、1998 年、pp. 76−89 参照。

27）図 8 の写真は「モンテスキウ文書」にもプリントが一枚存在する（N.a.fr.15040, f.56）。クラフトがモンテスキウに贈ったのだろう。秘書のピナールによって「日本庭園　ヴェルサーユのモンテスキウ邸　1894 年 −1897 年」と注記されているが、撮影場所は明らかに間違っている。

図版

図 1.　*Le Monde illustré*, 9 novembre 1889, p. 295.

図 2.　*Revue de l'exposition universelle de 1889*, t.1, p. 181.

図 3.　« Portrait de Robert de Montesquiou et sa nièce Aude de M., Rue Franklin », N.a.fr.15038, f.18. Cliché Bibliothèque nationale de France, Paris.

図 4.　« Robert de Montesquiou, à Bois-Boudran, chez la comtesse Greffulhe », N.a.fr.15037, f.89. Cliché Bibliothèque nationale de France, Paris.

図 5.　« Le Pavillon Montesquiou, à Versailles, Le Jardin japonais », N.a.fr.15040, f. 55. Cliché Bibliothèque nationale de France, Paris.

図 6.　« La serre japonaise », *Revue illustrée*, 1er août 1894, p. 124.

図 7.　« Pavillon Montesquiou à Versailles », N.a.fr. 15040, f. 172. Cliché Bibliothèque nationale de France, Paris.

図 8.　Collection de la Société des Amis du Vieux-Reims / Musée Le Vergeur.

図 9.　Collection de la Société des Amis du Vieux-Reims / Musée Le Vergeur.

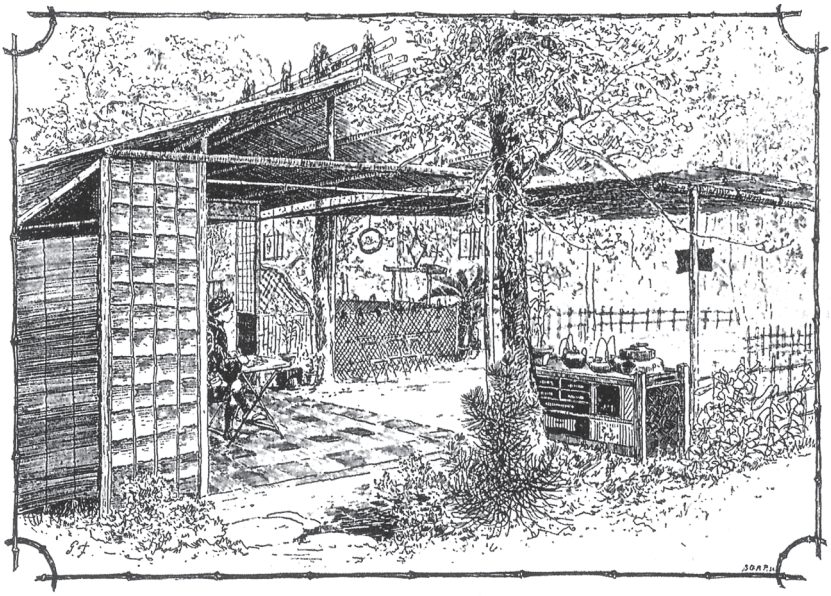
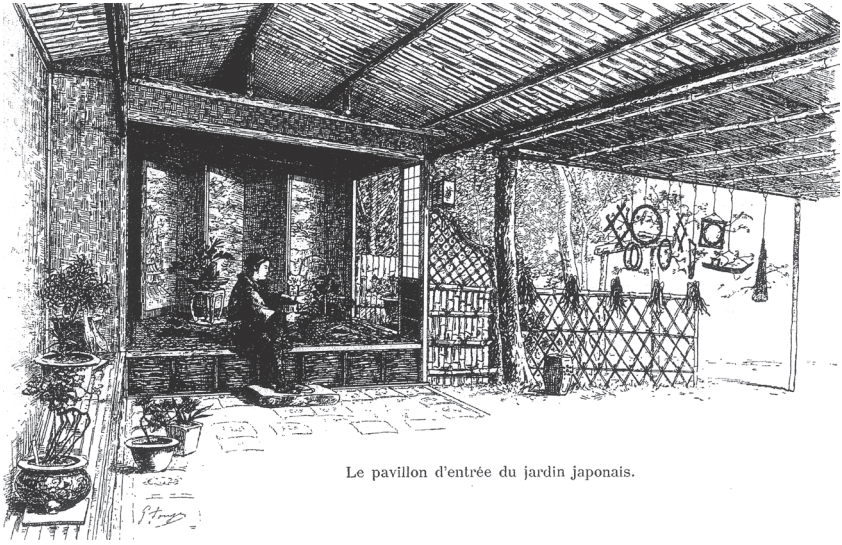


図 1



Le pavillon d'entrée du jardin japonais.

図 2

図３（BnF）

図４（BnF）

図５（BnF）

図６

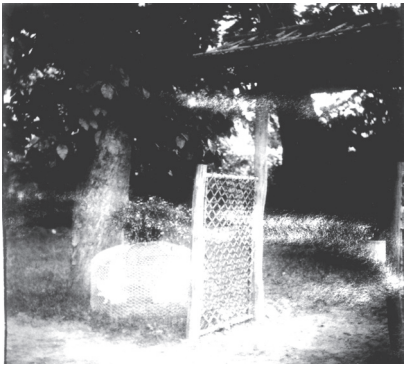


図７（BnF）

図８

図９

Un jardinier japonais en France

— sur les traces de HATA Wasuke (première partie)

SUZUKI Junji

Les Mémoires de Robert de Montesquiou rapportent l'existence d'un jardinier japonais, « Hata Wasuké », qui vint en France pour présenter l'horticulture nipponne à l'exposition universelle de Paris en 1889 et qui y resta longtemps. Avant nos recherches, on n'avait aucune information détaillée sur ce jardinier particulier. En rassemblant divers documents fragmentaires (essai de Montesquiou, le *Journal* des Goncourt, articles parus dans des revues, archives conservées dans le Bureau des documents diplomatiques du Ministère des affaires étrangères du Japon, photographies, souvent ni légendées ni datées, conservées à la Bibliothèque nationale de France ainsi qu'au Musée Le Vergeur à Reims), nous reconstituons dans cet article la vie originale de ce jardinier « de génie ».

Après la fermeture de l'exposition, Hata a été engagé par Montesquiou pour embellir son jardinet, rue Franklin à Paris, pour construire un jardin japonais à Bois-Boudran (Seine-et-Marne) chez la comtesse Greffulhe en trois ans, puis pour soigner les plantes du pavillon Montesquiou à Versailles. Il a également créé dans les années 1890 un jardin japonais dans le parc « Midori no sato » aux Loges-en-Josas, à quelques kilomètres de Versailles, qui appartenait à Hugues Krafft. Nous publions aussi au moins une photographie pour chaque étape de son travail en France.

Dans la seconde partie de l'article, nous mettrons en lumière la dernière moitié de la vie de Hata chez Edmond de Rothschild à Boulogne-sur-Seine. Nos regards se porteront également sur la famille Hata à Yokohama, ville natale du jardinier.